

ルカの福音書 21 回
ツァラアト患者の癒し
ルカ 5：12～16

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスはカペナウムに下り、そこを宣教の拠点とした。
- ②イエスの権威は、悪霊の追い出しと病の癒しによって証明された。
- ③イエスは、最初の弟子たちを招かれた。
- ④イエスの権威は、弟子たちが確信したとおりのものであった。
 - * ツァラアト患者の癒し（汚れを清める権威）
 - * 中風の人の癒し（罪を赦す権威）
- ⑤これ以降、宗教的指導者層との対立が激しくなる。

(2) ギリシア語の「レプラ」の意味

- ①英語では、「leprosy」である。
- ②かつては、「らい病」と訳されていた。
- ③これらの用語は、医学的には、「ハンセン氏病」と呼ばれるものである。
- ④しかし、当時のパレスチナには、この病気はなかった。
 - * これは、慢性の皮膚病だろう。乾癬（かんせん）がその例である。
 - * 織物、編物、皮製品に関する言及もある（レビ 13 章）。
 - * 家の壁に関する言及もある（レビ 14 章）。
- ⑤反省に立った新しい訳語
 - * 「重い皮膚病」（新共同訳）
 - * 「ツァラアト」（新改訳 2017）

2. アウトライン

- (1) ツァラアト患者の懇願（12 節）
- (2) イエスの応答（13 節）
- (3) 癒しの結果（14～16 節）

3. 結論：メシア時代の到来

ツァラアト患者の癒しについて学ぶ。

I. ツァラアト患者の懇願

1. 12 節 a

Luk 5:12a さて、イエスがある町におられたとき、見よ、全身ツァラアトに冒された人がいた。

(1) 文脈上、これはガリラヤのある町である。

①その町で、メシアがガリラヤに現われたことを証明する奇跡が起こった。

(2) ルカの医者としての視点が表われている。

①「全身ツァラアトに冒された人」（新改訳 2017）

②「全身重い皮膚病にかかった人」（新共同訳）

③彼は、間違いなくツァラアト患者である。

(3) この人は、ユダヤ人のツァラアト患者である。

①癒された後、モーセの律法の定めに従っていけにえを献げる義務がある。

②後で見るが、ユダヤ人のツァラアト患者が癒されるのは、これが初めてである。

(4) レビ記 13～14 章にツァラアトに関する規定がある（合計 116 節）

Lev 13:2 「ある人のからだの皮膚に腫れもの、あるいはかさぶた、あるいは斑点ができて、からだの皮膚にツァラアトに冒された患部が現れたときは、彼を祭司アロンのところか、アロンの子らで祭司の一人のところに連れて来なければならない。

Lev 13:3 祭司は、そのからだの皮膚の患部を調べる。その患部の毛が白く変わり、患部がそのからだの皮膚よりも深いところに見えているなら、それはツァラアトに冒された患部である。祭司はそれを調べ、彼を汚れていると宣言する。

①ツァラアトの判定を下すのは、祭司である。

②ツァラアト患者は、儀式的に汚れている状態にある。

③幕屋や神殿に入ることができない。霊的祝福を受ける機会が奪われた。

④ツァラアト患者に触れた人は、汚れた状態になる。

⑤ラビの中には、ツァラアトは罪の結果であると強く主張する者もいた。

⑥キリスト教会もまた、長年、似たような過ちを犯してきた。

(5) 聖書には、なぜツァラアトに関する規定がよく出てくるのか。

①衛生概念が未発達なので、皮膚病患者は多くいた。

②皮膚病は治療困難な病だったので、患者との接触を制限する必要があった。

③ツァラアトと罪の間には、相関関係はない。

④しかし、神の聖さを教えるために、ツァラアトは視覚教材として用いられた。

* 罪は内部深くに潜み、すぐに伝染する。

(6) レビ 13：45 には、ツァラアト患者に対する命令が記されている。

Lev 13:45 患部があるツァラアトに冒された者は自分の衣服を引き裂き、髪の毛を乱し、口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ぶ。

- ①ツァラアトの判定を受けた者は、悲惨な状態に直面する。
- ②その者は、自分の衣服を引き裂く。
- ③家族や共同体を離れて、隔離された地区に住むようになる。
- ④髪の毛を乱し、目から下の顔の部分を覆う。
- ⑤歩く時は、「汚れている、汚れている」と叫ぶ。
- ⑥以上の命令の目的は、ツァラアトの伝染を防ぐためである。
- ⑦微生物や細菌に関する知識がない時代の規定としては、驚くべきものである。

2. 12 節 b

Luk 5:12b その人はイエスを見ると、ひれ伏してお願いした。「主よ、お心一つで私をきよくすることがおできになります。」

(1) その人は、「ひれ伏してお願いした」。

- ①この動作は、旧約的なものである。
- ②神に祈りを捧げる時の姿勢である。
- ③シモン・ペテロも舟の中で同じ姿勢を取った（ルカ 5：8）。
- ④彼はすでに、モーセの律法の垣根を越えている。

(2) その人は、「主よ」と言った。

- ①これは、キュリオス（キュリエ）という呼びかけである。
- ②シモンも舟の中で同じ呼びかけをした（ルカ 5：8）。
- ③シモンはイエスから離れ、ツァラアト患者はイエスに近づく。
- ④ともに、メシアである方への健全な応答である。

(3) 訳語の比較

「主よ、お心一つで、私をきよくすることがおできになります」（新改訳 2017）

「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」（新共同訳）

「主よ、みこころでしたら、きよめていただけるのですが」（口語訳）

「主よ、御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん」（文語訳）

(4) 彼は、イエスにはツァラアトを癒す力があると信じていた。

- ①「主よ」という呼びかけの言葉が、それを示している。
- ②しかし、イエスが、実際にそうしてくださるかどうかわかっていた。

- ③隔離生活を強いられていたので、自分の価値を見失っていたのであろう。
- ④自分には、癒しの恵みを受ける資格はないと思っていた。

II. イエスの応答（13 節）

1. 13 節

Luk 5:13 イエスは手を伸ばして彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ」と言われた。すると、すぐにツァラアトが消えた。

(1) イエスの憐み

- ①イエスは、ことばを発するだけで癒しを行えた。
- ②しかし、手を伸ばして、彼にさわった。
- ③ペテロの姑の癒しの場合も、「手を取って起こされた」とある（マコ 1：31）。
- ④モーセの律法は、ツァラアト患者に触れると汚れると教えていた。
- ⑤この場合は、イエスの清さが伝染し、汚れを追い出したのである。
- ⑥イエスは、「わたしの心だ」と言われた。

(2) 「きよくなれ」は、ギリシア語で一言「καθαρίσθητι」。

- ①英語では、「Be thou made clean」である。
- ②受動態の命令形である。
- ③彼は、即座に癒された。
 - * 悪霊の追い出しは、即座に起こった。
 - * シモンの姑の熱病は、即座に癒された。
- ④魂と肉体が同時に癒された。
 - * ツァラアトの宣告を受けてから、他人から触れられたことがなかった。
- ⑤イエスのことばと行動によって、彼は全人的に癒された。

III. 癒しの結果（14～16 節）

1. 14 節

Luk 5:14 イエスは彼にこう命じられた。「だれにも話してはいけない。ただ行って、自分を祭司に見せなさい。そして、人々への証しのため、モーセが命じたように、あなたのきよめのささげ物をしなさい。」

(1) イエスは、「だれにも話してはいけない」と言われた。

- ①群衆が、押し寄せて来ないように。
- ②イエスのメッセージが、正しく理解されるように（政治的メシア像の危険性）。
- ③もし話せば、彼はエルサレムに到達することができないであろう。
- ④証言する前に、祭司から清めの宣言を受ける必要があった。

(2) イエスは、モーセの律法に従ってきよめのささげ物をするように命じた。

①レビ記 13～14 章は、ツァラアトが癒された場合の清めの手順を記録している。

*2 羽の生きているきよい小鳥を取り、1 羽をほふる。

*生きている小鳥を血に浸し、それから野に放す。

*小鳥の血を癒された人に、7 度振りかける。

*7 日間の厳しい観察の期間が続く。

*その後、癒されたと宣言される。

*8 日目に、4 種類のささげ物を献げる。

*罪過のためのいけにえの血を取り、それをきよめられる者に塗る。

・右の耳たぶ、右手の親指、右足の親指

*同じ場所に、オリーブ油を塗る。

*その後、ユダヤ人社会に復帰することができる。

(3) 「人々への証しのため、」

①人々とは、原文では「彼ら」である。先行詞が存在しない。

②「彼ら」とは、宗教的指導者たちである。

③ツァラアト患者の癒しは、彼らに対する「しるし」であった。

2. 15～16 節

Luk 5:15 しかし、イエスのうわさはますます広まり、大勢の群衆が話を聞くために、また病気を癒やしてもらうために集まって来た。

Luk 5:16 だが、イエスご自身は寂しいところに退いて祈っておられた。

(1) イエスの意図通りにはならなかった。

①癒された人は、言い広めた（マコ 1：45）。

*ルカはそれを書いていない。

*イエスの権威がここでの強調点である。

②癒された人がエルサレムに上ったかどうかは、分からない。

(2) イエスのうわさが広まり、大勢の群衆が集まって来た。

①イエスの話を聞くため

②病気を癒してもらうため

(3) イエスは、荒野に退いて祈っておられた。

①これは、イエスの日常の習慣であった。

- ②民衆に受け入れられるかどうかは、重要なことではなかった。
- ③父なる神の承認を受けることのほうが重要である。

結論：メシア時代の到来

1. メシア的王国の預言

- (1) 国家的に危機に際して、預言者たちはメシア的王国を預言した。
- (2) バビロン捕囚以降も、同じである。
- (3) マラキ以降、メシア待望の時代になる。
- (4) バプテスマのヨハネが登場した。
- (5) そして今、民族的期待が成就した。

2. メシア到来の証拠

- (1) これは、ユダヤ人のツァラアト患者が癒された最初の例である。
 - ①祭司たちは、このために「きよめのささげ物」を献げたことがなかった。
- (2) 旧約聖書では、2 名のツァラアト患者が癒されている。
 - ①ミリアムの例（民 12：10）
 - *この癒しは、モーセの律法が完結する前の出来事である。
 - ②ナアマン将軍の例（2 列 5：14）
 - *ナアマンは、シリア人であった。
- (3) 当時のユダヤ教は、奇跡を「一般的な奇跡」と「メシア的奇跡」に区分していた。
 - ①ツァラアトの癒しは、メシア的奇跡である。
 - ②祭司たちは、それを理解した。
 - ③一般民衆も、それを理解した。
 - ④メシア的奇跡の場合は、通常の反応とは異なる反応が返ってくる。
- (4) ユダヤ人たちが待ち望んでいたメシアが到来した。
 - ①しかし彼らは、態度を保留した。
 - ②イエスに対する態度を保留するのは、残念なことである。
 - ③今は、恵みの時代である。

ルカの福音書 22 回
中風の人の癒し
ルカ 5：17～26

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスはカペナウムに下り、そこを宣教の拠点とした。
- ②イエスの権威がさまざまな形で証明された。
 - * 悪霊の追い出し（悪霊を制する権威）
 - * 熱病の癒し（病を癒す権威）
 - * ツァラアト患者の癒し（汚れを清める権威）
- ③今回のテーマは、中風の人の癒し（罪を赦す権威）である。

(2) ルカの意図

- ①癒し自体は、第二義的意味しか持っていない。
- ②罪を赦す権威が、第一義的意味である。
- ③罪を赦すことができるのは、神だけである。
- ④イエスは、自らが神であることを宣言された。

2. アウトライン

- (1) 観察の段階（17 節）
- (2) 中風の人の登場（18～19 節）
- (3) イエスの神性宣言（20～21 節）
- (4) イエスの権威の証明（22～26 節）

3. 結論

- (1) 信仰の力
- (2) 罪と病の関係
- (3) ルカの執筆目的

ユダヤ的視点から、中風の人の癒しについて学ぶ。

I. 観察の段階（17 節）

1. 17 節 a

Luk 5:17a ある日のこと、イエスが教えておられると、パリサイ人たちと律法の教師たちが、そこに座っていた。彼らはガリラヤとユダヤのすべての村やエルサレムから来ていた。

(1) メシア運動の評価のプロセス (3 段階)

①観察の段階

- *メシア運動が起こった場合は、本物かどうかを吟味するプロセスが始まる。
- *サンヘドリンが審問団を派遣して、吟味の作業を実施する。
- *第1段階では、沈黙して目の前に起こっていることがらを観察する。
- *メシア運動ではないと判断した場合は、ここで終わる。

②審問の段階

- *本物のメシア運動である可能性がある判断した場合は、第2段階に進む。
- *第2段階では、ありとあらゆる角度から質問を投げかける。

③評価の段階

- *最後に、それが本物のメシア運動であるかどうかを宣言する。

(2) イエスが教えておられる場所に、宗教的指導者たちがいた。

①パリサイ人たちと律法の教師たち（律法学者）

- *パリサイ人とは、口伝律法を擁護する政党である。
- *律法学者の多くがパリサイ人であるが、全員がそうというわけではない。

②彼らは、「ガリラヤとユダヤとのすべての村々」と「エルサレム」から来ていた。

③メシア運動の「観察の段階」が始まっていた。

(3) イエスがいる場所は、ペテロの家である。

①この家は、緊張感で満ちていたことであろう。

2. 17 節 b

Luk 5:17b イエスは主の御力によって、病気を治しておられた。

(1) 「キュリオスから来る癒しの力」である。

①父なる神が、聖霊を通して癒しを行われる。

②イエスは、ナザレの会堂で、イザ 61：1 を朗読された（ルカ 4：18～19）。

Luk 4:18 「主の霊がわたしの上にある。／貧しい人に良い知らせを伝えるため、／主はわたしに油を注ぎ、／わたしを遣わされた。／捕らわれ人には解放を、／目の見えない人には目の開かれることを告げ、／虐げられている人を自由の身とし、

Luk 4:19 主の恵みの年を告げるために。」

③イエスは、受肉に際して神としての特権を放棄された。

④人間イエスが聖霊に依存されたことは、私たちへの教訓となる。

II. 中風の人登場（18～19 節）

1. 18 節

Luk 5:18 **すると見よ。男たちが、中風をわずらっている人を床に載せて運んで来た。そして家の中に運び込み、イエスの前に置こうとした。**

(1) その家は、人で一杯であった。

- ①この地方で発掘された家のサイズは、最大でも一辺が3間（5.4メートル）。
- ②面積は、9坪（18畳）。立った状態で、50人位が最大の収容人数であろう。

(2) 中風の人を運んできたのは、4人の男であった（マコ2:2~3）。

- ①脳溢血の後遺症で、体の一部、あるいは、全部を動かすことができない状態。
- ②この4人は、家族か、友人であろう。

2. 19 節

Luk 5:19 **しかし、大勢の人のために病人を運び込む方法が見つからなかったので、屋上に上って瓦をはがし、そこから彼の寝床を、人々の真ん中、イエスの前につり降ろした。**

(1) 余りにも混雑しているので、イエスに近づくことができなかった。

- ①普通なら諦めて帰る状況である。
- ②彼らは、屋上に上って瓦をはがした。
- ③そこから彼の寝床を、人々の真ん中、イエスの前につり降ろした。

(2) この地方の家の構造

①平屋建てで、屋上に人が乗っても平気なくらいに頑丈であった。

②屋上の構造

- * 梁を渡し、その上にいかだ状の木枠を乗せる。
- * さらに、木の枝や、木の葉で覆う。
- * 最後に、藁を混ぜた粘土を乗せ、それを平らに延ばす。
- * 乾燥すると、強固な屋上になった。

③外壁に階段が取り付けられおり、そこから屋上に上ることができた。

④ルカの福音書では、「瓦をはがし」となっている。

- * これはタイルのことである。
- * 当時、異邦人の建築様式の影響を受けた家があった。

III. イエスの神性宣言（20～21 節）

1. 20 節

Luk 5:20 **イエスは彼らの信仰を見て、「友よ、あなたの罪は赦された」と言われた。**

(1) マタイとマルコでは、「子よ」という呼びかけになっている。

- ①イエスの親愛な態度が表現されている。
- ②イエスは、まず罪の赦しを宣言された。
 - *この順番が重要である。
 - *パリサイ人や律法学者の観察の目を意識してのことである。
- ③イエスは、ご自分には罪を赦す権威があることを示された。
- ④後に、そのことを肉体的な癒しを行うことによって証明される。

2. 21 節

Luk 5:21 ところが、律法学者たち、パリサイ人たちはあれこれ考え始めた。「神への冒瀆を口にするこの人は、いったい何者だ。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか。」

- (1) 彼らはまだ発言することを許されていない。
 - ①今は観察の段階にいますので、心の中であれこれ考えるだけである。
- (2) 彼らの神学は正しい。
 - ①神のほかに、罪を赦すことのできる者はいない。
 - ②罪の赦しを宣言するのは、神への冒瀆である。
 - ③しかし彼らは、イエスは神であるという結論を出そうとはしなかった。

IV. イエスの権威の証明 (22～26 節)

1. 22～23 節

Luk 5:22 イエスは彼らがあれこれ考えているのを見抜いて言われた。「あなたがたは心の中で何を考えているのか。」

Luk 5:23 『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。

- (1) イエスは、彼らの心の中を見抜いておられた。
 - ①彼らの心は、イエスに対する怒りで煮えくり返っていた。
- (2) ラビ的教授法：質問には質問で。
 - ①生徒に考えさせ、自分で正しい結論を導き出せるように指導する。
 - ②「あなたの罪は赦された」と「起きて歩け」。どちらが易しいか。
 - *「あなたの罪は赦された」と言うほうが簡単である。言えばそれで終わり。
 - *「起きて歩け」と言うほうが難しい。結果が伴う必要がある。

2. 24 節

Luk 5:24 しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために——。」そう言って、中風の人に言われた。「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい。」

(1) 「人の子」とはメシアの称号である（ダニ 7：13～14）。

- ①ルカの福音書では、この称号は初めて登場する。
- ②ルカの福音書と使徒の働きで、合計 26 回登場する。
- ③すべてイエスの自称である。使 7：56（ステパノのメッセージ）は例外。

(2) ラビ的教授法：Kal Vahomer (Light and heavy) （カル・バ・ホメル）

- ①「軽いものから重いものへ」という意味
- ②より難しいことを行うことによって、易しいことを証明する。
- ③イエスの基準
 - * 「軽いもの」とは、肉体の癒し。
 - * 「重いもの」とは、罪の赦し。
- ④彼らの基準
 - * 「軽いもの」とは、罪の赦し。
 - * 「重いもの」とは、肉体の癒し。

(3) イエスは、「寝床をたたんで、家に帰りなさい」と命じた。

- ①より重いことを命じ、罪の赦しが本当であることを証明しようとした。

3. 25～26 節

Luk 5:25 すると彼はすぐに人々の前で立ち上がり、寝ていた床を担ぎ、神をあがめながら自分の家に帰って行った。

Luk 5:26 人々はみな非常に驚き、神をあがめた。また、恐れに満たされて言った。「私たちは今日、驚くべきことを見た。」

(1) 中風の方は、信仰によって応答し、すぐに立ち上がった。

- ①床に寝かされていた人が、床を担いで、神をあがめながら家に帰って行った。
- ②そこにいた人々も、神をあがめた。

(2) イスラエルは、イエスをメシアとして受け入れるかどうかの岐路に立たされた。

- ①審問団は、エルサレムに戻り、イエスの主張は吟味に値すると報告した。
- ②この時点から、第 2 の段階（審問の段階）に入っていく。
- ③イエスは常にパリサイ人たちの監視下に置かれるようになる。
- ④彼らは常に、イエスに論争を挑むようになる。

結論

1. 信仰の力

- (1) イエスは「彼らの信仰」をご覧になった。
 - ①彼らの中には、中風の人も含まれている。
 - ②4 人の男たちは、イエスは病を癒すことができると信じた。
 - ③中風の人も、イエスを信じた。
 - *彼自身に信仰がなければ、罪の赦しの宣言はあり得ない。
- (2) イエスは、まず罪の赦しを宣言された。
 - ①この順番が重要である。
 - ②パリサイ人や律法学者の観察の目を意識してのことである。
 - ③イエスは、ご自分には罪を赦す権威があることを示された。
 - ④次に、そのことを肉体的な癒しを行うことによって証明された。

2. 罪と病の関係

- (1) すべての病の原因は、究極的には罪である。
 - ①イエスは、病の原因に手を置かれた。
 - ②罪責感が原因となっている病がある。
- (2) 罪の赦しは、究極的には癒しをもたらす。
 - ①すぐに癒される場合がある。
 - ②そうでない場合もある。
 - ③罪の赦しによる癒しは、終末論的概念である。

3. ルカの執筆目的

- (1) ルカの執筆目的の 1 つは、「神をあがめる」ことである。
- (2) ルカの強調点は、「今日」である。
 - ①ルカ 4：21

Luk 4:21 イエスは人々に向かって話し始められた。「あなたがたが耳にしたとおり、今日、この聖書のことばが実現しました。」

- ②ルカ 5：26

Luk 5:26 人々はみな非常に驚き、神をあがめた。また、恐れに満たされて言った。「私たちは今日、驚くべきことを見た。」

- ③メシア到来の時は、「今日」である。
- ④イエスの権威が現われ、人々はそれを認めた。
- ⑤ルカは、読者も同じことをするように勧めている。

ルカの福音書 23 回

レビの召命

ルカ 5：27～32

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①イエスはメシアとして、解放の恵みを種々の人たちに施された。

* 悪霊に憑かれた人（悪霊の支配からの解放）

* ツァラアト患者（生涯の汚れからの解放）

* 中風の人（肉体的ハンディキャップからの解放）

②ここでは、取税人に解放の恵みを施される。

* 社会的な排斥と物質主義からの解放

* そればかりか、イエスとの交わりが提供される。

③パリサイ人たちが、その場にいる。

2. アウトライン

(1) レビの召命（27～28 節）

(2) イエスとの交わり（29 節）

(3) イエスの罪人に対する態度（30～32 節）

3. 結論

(1) イエスの招き

(2) 招きへの応答

(3) ザアカイとの対比

ユダヤ的視点から、レビの召命について学ぶ。

I. レビの召命（27～28 節）

1. 27 節 a

Luk 5:27a その後、イエスは出て行き、収税所に座っているレビという取税人に目を留められた。

(1) 中風の人の癒しの出来事の、直後である。

①場所は、カペナウムである。

②カペナウムは、交通の要衝の地である。

(2) レビという取税人が収税所に座っていた。

- ①取税人は、英語で「publican」という。
- ②ラテン語の「publicanus」（公の職務に就く者）からの借用語である。
- ③ザアカイは取税人のかしらであったが（ルカ 19：2）、レビはそうではない。

(3) 取税人という職業

- ①口伝律法では、取税人になることは禁じられていた。
- ②取税人の職は、入札で最高額を投じた者に与えられた。
- ③仕事の内容は、ローマ帝国の代理人として、税や罰金を徴収すること。
- ④この仕事は、大きな利益をもたらすものであった。
 - * 民衆から集めた額と、ローマに納める額との差額が、収入になった。
 - * ローマ帝国は、その習慣を認めていた。

(4) ユダヤ人たちが取税人を憎んだ理由

- ①取税人は、ユダヤ人たちを抑圧しているローマ帝国に加担していた。
- ②取税人は、同胞から金を盗むことによって豊かになっていた。

(5) ユダヤ教の指導者たちは、取税人との交わりを禁止した。

- ①例外は、取税人同志の交わりである。
- ②「取税人と罪人」という表現。罪人とは、遊女（娼婦）の婉曲語である。

(6) タルムードは、取税人を 2 種類に区別している。

- ①所得税を徴収する取税人
- ②通行税を徴収する取税人
 - * 後者の方が、評判が悪い。より多くのものをだまし取れるから。

(7) レビは、通行税を徴収する取税人であった。

- ①陸路と海路からの徴税があった。
 - * ヘロデの領地の外に出て行く舟からの徴税
 - * ダマスコからエジプトに向かう商人たちからの徴税
- ②レビは、富のために、名声も家族も祖国も捨てた人物である。
- ③その人物に、イエスは目をとめられた。

2. 27 節 b

Luk 5:27b そして「わたしについて来なさい」と言われた。

- (1) この箇所、レビが第 7 番目の弟子として召される。

- ①ペテロとアンデレ（漁師）
- ②ヤコブとヨハネ（漁師）
- ③ピリポとナタナエル
- ④そして、レビ（マタイとも呼ばれていた）

(2) レビは、イエスの権威を認識した。

- ①これは、突然起こったことではない。
- ②収税所は、情報の収集センターのようなものである。
- ③彼は、イエスの教え、奇跡、風貌に深い感銘を受けていた。

3. 28 節

Luk 5:28 **するとレビは、すべてを捨てて立ち上がり、イエスに従った。**

(1) これは、徹底的な従順である。

- ①収入の多い職業からの離脱
- ②経済的犠牲
- ③イエスからの召命を特権と考えた（収税人は宗教的活動から除外されていた）。
- ④ルカは、読者もレビの行動を見倣うようにと勧めている。

(2) マタイの福音書には、「すべてを捨てて」ということばはない。

- ①「自分の口ではなく、ほかの者にあなたをほめさせよ。自分の唇ではなく、よその人によって」（箴 27：2）

II. イエスとの交わり（29 節）

1. 29 節

Luk 5:29 **それからレビは、自分の家でイエスのために盛大なもてなしをした。収税人たちやほかの人たちが大勢、ともに食卓に着いていた。**

(1) レビは、自分の家でイエスのために盛大なもてなしをした。

- ①イエスから受けた恵みに感謝する（お返しをする）会である。
- ②彼が物質主義から解放されたことは、明白である。

(2) 食卓に着いていた人たち

- ①主賓は、イエス。
- ②次席は、イエスの弟子たち 6 人。
- ③それ以外の招待客として、収税人と罪人（娼婦）がいた。
- ④そして、その外側に群衆がいた。

⑤その様子を、パリサイ人たちが観察していた。

(3)「ともに食卓に着いていた」

①ギリシア語で、「スン-アナケイミ」である。

②肘をついて体を横たえるという意味。

③ユダヤ的には、食事をともにすることは、親密な交わりを意味する。

④黙3:20

Rev 3:20 見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

III. イエスの罪人に対する態度 (30～32 節)

1. 30 節

Luk 5:30 すると、パリサイ人たちや彼らのうちの律法学者たちが、イエスの弟子たちに向かって小声で文句を言った。「なぜあなたがたは、取税人たちや罪人たちと一緒に食べたり飲んだりするのですか。」

(1) 彼らは、審問の段階に入っているので、疑問をぶつけた。

①直接イエスにではなく、弟子たちに言った。

②イエスは民衆の間で人気があった。

(2) 彼らの理解では、イエスは不法なことを行っている。

①裕福な者が、高名なラビを食事に招待するのは、称賛に値する行為である。

②しかし、レビは取税人仲間と遊女しか招いていない。

③そのような場にイエスが同席しているのは、理解できないことである。

④もしイエスがメシアであるなら、このような者たちと交わるはずがない。

⑤儀式的汚れを受ける恐れがある。

2. 31～32 節

Luk 5:31 そこでイエスは彼らに答えられた。「医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人です。」

Luk 5:32 わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです。」

(1) 取税人や遊女は、道徳的な意味で病人である。

①彼らは、助けを必要としている人々である。

②イエスは、彼らを癒す医者である。

(2) パリサイ人たちは、不遜にも、自分たちは霊的に健康であると考えていた。

①霊的癒しを必要としていない。

②従って、医者が必要ではない。

(3)「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためです」

①このことばは、レビの人生に成就した。

②パリサイ人たちの問題点は、自分が義人だと思っていること。

③自分は罪人だという認識がなければ、イエスの招きの声を聴くことは難しい。

④イエスが人々を 2 分するとは、このことである。

結論

1. イエスの招き

(1) 権威ある招き

①レビは、宗教的指導者たちの権威に従っていた時があった。

②しかし、今は政治的権威に従っている。

③さらに、富に仕えている。

④その彼が、イエスの権威はいかなる地上の権威よりも上であることを認めた。

(2) 恵みに満ちた招き

①取税人が招かれることは、奇跡的なことである。

(3) 愛に満ちた招き

①レビは、神の愛の中に招かれたのである。

2. 招きへの応答

(1) 信仰による決断

①収税所を去ると、2 度との取税人には戻れない。

②収税所そのものは、依然として活動を継続する。

③犠牲を伴う決断であった。

(2) 賜物を生かす人生

①彼の人生は、搾取から奉仕の人生に変えられた。

②取税人としての経験が生きたことであろう。

③しかし、彼は言葉数の多い人ではない。

* 福音書の中で、彼がイエスに質問したという記録はない。

④その彼が、マタイの福音書を書き残した。

*これは、ユダヤ人に向けて書かれた福音書である。

⑤ここに、神の大いなる「どんでん返し」（アイロニー）がある。

⑥私たちも、神の「どんでん返し」になろうではないか。

3. ザアカイとの対比

(1) ザアカイは、取税人のかしらで、金持ちであった。

①レビに関しては、そういう記述はない。

(2) ルカ 19：9～10

Luk 19:9 イエスは彼に言われた。「今日、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」

Luk 19:10 人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです。」

①公生涯の初期にレビが登場し、後期にザアカイが登場する。

②イエスの公生涯は、似たような2つのエピソードで括られている。

(3) そこでイエスが語られたことは、イエスの公生涯を解釈する鍵になる。

(4) 「人の子は、失われた者を捜して救うために来たのです」

ルカの福音書 24 回

断食論争

ルカ 5 : 33～39

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①罪の赦しの宣言を境に、メシア運動の吟味は次の段階に入った。

＊観察→審問→決定

②イエスは、取税人レビを召された。

③レビは、自分の家でイエスのために盛大なもてなしをした。

④その場にいたパリサイ人たちは、審問を開始した。

＊弟子たちに、なぜ取税人たちや罪人たちと交わるのかと文句を言った。

＊次に、イエスに断食に関する質問をした。

(2) この時期、イエスは公生涯の重要な時期に入っていた。

①パリサイ人たちとの論争が始まる。

②論争のテーマは、口伝律法に関するものである。

③聖書は、ユダヤ的視点で読まないといけないと深い意味を理解することができない。

2. アウトライン

(1) 断食に関する質問

(2) 花婿の友人のたとえ

(3) 新しい着物と古い着物のたとえ

(4) ぶどう酒と皮袋のたとえ

(5) 古いぶどう酒のたとえ

3. 結論

(1) 混ざることのない4つのもの

(2) メシア的王国の希望

(3) ロマ書7章から8章へ

断食論争の内容と背景について学ぶ。

I. 断食に関する質問

1. 33 節

Luk 5:33 また彼らはイエスに言った。「ヨハネの弟子たちはよく断食をし、祈りをしていま

す。パリサイ人の弟子たちも同じです。ところが、あなたの弟子たちは食べたり飲んだりしています。」

(1) 質問したのは、誰か。

①ルカは、別の状況での話をここに入れた可能性がある。

②マコ 2 : 18

Mar 2:18 さて、ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは、断食をしていた。そこで、人々はイエスのもとに来て言った。「ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たちは断食をしているのに、なぜあなたの弟子たちは断食をしないのですか。」

③ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは、ともに、口伝律法を重視していた。

(2) 断食の習慣の歴史的経緯

①旧約聖書が命じる断食の日は、贖罪の日だけである。

*レビ 16 : 29

②捕囚期以降、エルサレム崩壊を嘆くために 4 回の断食が加わった。

*ゼカ 8 : 19

Zec 8:19 万軍の【主】はこう言われる。「第四の月の断食、第五の月の断食、第七の月の断食、第十の月の断食は、ユダの家にとって、楽しみとなり、喜びとなり、うれしい例祭となる。だから、真実と平和を愛しなさい。」

③イエス時代になると、パリサイ人たちは、週に 2 回断食をした。

*月曜と木曜に、水も飲まない断食を実行した。

*師は、弟子たちに断食を教えるべきである。

*パリサイ人たちは、イエスも口伝律法に従うべきであると考えていた。

*イエスは悔い改めを説いていた。断食は、悔い改めの表現である。

*イエスは断食を否定しなかったが、その誤用を批判された。

*イエスが断食したという記録は、荒野での 40 日間の断食しかない。

(3) タルムード誕生の歴史的経緯

①ソフリム学派（前 450 年～前 30 年）

*捕囚から帰還した時期に、律法学者エズラが活躍した。

*彼がソフリム学派を設立した。

*ソフリムとは、書記（律法学者）のことである。

*目的は、モーセの律法を教え、再び捕囚が起らないようにすること。

*モーセの律法は、613 の命令から成る。

*その周りに「垣根」を作れば、民は律法違反の罪を犯すことがなくなる。

*その「垣根」が、ラビ的律法である。

*過半数が賛成した時に、それは、全世界のユダヤ人が守るべき律法となる。

「子やぎを、その母親の乳で煮てはならない」

(出 23 : 19、34 : 26、申 14 : 21)

*カナン人たちは、初子のやぎを母の乳で煮て、バアルに献げていた。

*この命令は、カナン人の偶像礼拝からイスラエルの民を守るものとなった。

*前 1400 年頃の律法の目的が、前 400 年頃には忘れ去られていた。

*その結果、肉と乳製品を分けて食べるべきだという律法ができた。

*これが、今日の食物規定（コシェル規定）の中心である。

②タナイム学派（前 30 年～220 年）

*第 2 の学派である。タナイムとは、教師のことである。

*彼らは、ソフリム学派の律法を、聖書と同等かそれ以上のものと見なした。

*紀元 220 年までは、すべてが口伝律法であった。

*彼らは、神はモーセに 2 種類の律法を与えたと教えた。

・成文法（613 の律法）と口伝律法

*今日のユダヤ教も、この考え方を踏襲している。

*口伝律法を暗記していた人たちを、律法学者という。

*イエスの時代、口伝律法は完成途上にあった。

*メシアは、口伝律法に従うはずだという期待があった。

*しかしイエスは、一貫して口伝律法に反対した。

*バプテスマのヨハネの弟子たちは、口伝律法の断食の教えに従っていた。

*紀元 300 年頃に、ユダ・ハナシの命令によって、口伝律法が文字化された。

*約 650 年にわたるラビ的律法が、成文法となった。

*ソフリム学派とタナイム学派の口伝律法をミシュナという。

*ミシュナは、ヘブル語で約 1500 ページに及ぶ。

③アモライム学派（紀元 220 年～500 年）

*モライムとは、アラム語で教師という意味である。

*アモライム学派は、ゲマラ（アラム語）という注解書を付け加えた。

*ゲマラは、百科事典のブリタニカほどのサイズがある。

*口伝律法（パリサイ的律法）＝ミシュナ

*ミシュナ＋ゲマラ＝タルムード

II. 花婿の友人のたとえ

1. 34～35 節

Luk 5:34 イエスは彼らに言われた。「花婿が一緒にいるのに、花婿に付き添う友人たちに断食させることが、あなたがたにできますか。」

Luk 5:35 しかし、やがて時が来て、花婿が取り去られたら、その日には彼らは断食します。」

- (1) イエスは、この宴会を結婚式にたとえられた。
 - ①結婚式に行くのは、喜ぶためであって、断食するためではない。
 - ②ユダヤの婚礼は、7 日間続いた。
 - ③その間、断食、喪に服す行為、重労働などは禁じられた。
 - ④イエスは花婿であり、花嫁（イスラエルのこと）を迎えるために来られた。
 - ⑤イエスの弟子たちは、花婿に付き添う友人たちである。
 - ⑥その彼らに断食を強いるのは、正しくない。
- (2) しかし、花婿が取り去られたなら、彼らは断食するようになる。
 - ①公生涯のこの段階で、イエスは、十字架の死を暗示された。
 - ②恐らく弟子たちは、イエスの死と復活の間の 3 日間の中で断食したと思われる。

Ⅲ. 新しい着物と古い着物のたとえ

1. 36 節

Luk 5:36 イエスはまた一つのたとえを彼らに話された。「だれも、新しい衣から布切れを引き裂いて、古い衣に継ぎを当てたりはしません。そんなことをすれば、その新しい衣を裂くことになり、新しい衣から取った布切れも古い衣には合いません。

- (1) 新しい布切れは、洗うと縮む。
 - ①新しい布切れを古い着物に縫い付けることはしない。
 - ②それをする、新しい着物も、古い着物も、ともにだめになる。
- (2) イエスは、ユダヤ教につぎはぎをするために来られたわけではない。
 - ①イエスは、新しい秩序をもたらすために来られた。
 - ②もしユダヤ人たちがイエスを受け入れていたなら、メシア的王国が成就した。
 - ③ユダヤ人たちがイエスを拒否したので、教会が誕生することになる。
 - ④メシア的王国の希望は、今も生きている。

Ⅳ. ぶどう酒と皮袋のたとえ

1. 37～38 節

Luk 5:37 まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れたりはしません。そんなことをすれば、新しいぶどう酒は皮袋を裂き、ぶどう酒が流れ出て、皮袋もだめになります。

Luk 5:38 新しいぶどう酒は、新しい皮袋に入れなければなりません。

- (1) 当時は、ぶどう酒は皮袋に入れて、ロバやラクダに乗せて運んだ。
 - ①古い革袋は、長く使用されて、伸び切っている。

- ②そこに新しいぶどう酒を入れたなら、発酵力が強いので、皮袋は破裂する。
- ③新しい革袋の場合は、弾力性に富むので、持ちこたえることができる。

(2) イエスの教えは、新しいぶどう酒である。

- ①古い革袋であるユダヤ教は、その教えを受容することはできない。
- ②生命力に富んだイエスの教えは、パリサイ的ユダヤ教を破壊する。

V. 古いぶどう酒のたとえ

1. 39 節

Luk 5:39 まただれも、古いぶどう酒を飲んでから、新しい物を望みはしません。『古い物が良い』と言います。」

- (1) ぶどう酒は、古いもののほど良い味がある。
 - ①宗教的な人たちは、普通、古くからある伝統を重視する。
 - ②ここでの「古いぶどう酒」は、パリサイ的ユダヤ教である。
 - ③パリサイ人たちは、伝統的な口伝律法を好み、イエスの教えを拒否する。

結論

1. 混ざることのない4つのもの

- (1) 断食と宴会は、ミックスすることがない。
 - ①花婿メシアが到来した今は、婚礼の時である。
 - ②ユダヤ人たちがイエスを拒否したなら、断食が必要となる。
 - ③ユダヤ人たちがイエスを拒否したので、メシア的王国ではなく教会が誕生した。
- (2) 新しい布切れと古い衣は、ミックスすることがない。
 - ①イエスの教えは、新しい衣である。
 - ②新しい布切れで、パリサイ的ユダヤ教の繕いをすることは不可能である。
- (3) 新しいぶどう酒と古い革袋は、ミックスすることがない。
 - ①イエスの教えは、新しいぶどう酒である。
 - ②パリサイ的ユダヤ教は、古い革袋である。
 - ③イエスの教えは、パリサイ的ユダヤ教の中には収まり切らない。
- (4) 古いぶどう酒と新しいぶどう酒は、ミックスすることがない。
 - ①パリサイ的ユダヤ教は、古いぶどう酒である。
 - ②イエスの教えは、新しいぶどう酒である。
 - ③古いぶどう酒を好むパリサイ人たちは、新しいぶどう酒を試そうとはしない。

2. メシア的王国の希望

- (1) 旧約聖書が命じる断食の日は、贖罪の日だけである（レビ 16：29）。
- (2) 捕囚期以降、エルサレム崩壊を嘆くために 4 回の断食が加わった。

①ゼカ 8：19

Zec 8:19 万軍の【主】はこう言われる。「第四の月の断食、第五の月の断食、第七の月の断食、第十の月の断食は、ユダの家にとって、楽しみとなり、喜びとなり、うれしい例祭となる。だから、真実と平和を愛しなさい。」

- (3) メシア的王国においては、断食は喜びの宴会に変えられる。

①それゆえ、【主】が喜ばれる真実と平和を愛するべきである。

②【主】に対する断食でなければ、意味はない。

3. ロマ書 7 章から 8 章へ

- (1) 律法に束縛されたクリスチャン生活（ロマ書 7 章クリスチャン）
- (2) 聖霊に導かれたクリスチャン生活（ロマ書 8 章クリスチャン）
- (3) この 2 つの生活は、ミックスすることがない。

ルカの福音書 25 回
麦の穂を摘んで食べる弟子たち
ルカ 6 : 1～5

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①罪の赦しの宣言を境に、メシア運動の吟味は次の段階に入った。

＊観察→審問→決定

②この時期、イエスは公生涯の重要な時期に入っていた。

③口伝律法に関して、パリサイ人たちとの論争が始まる。

④福音書の中には、安息日論争が7回出てくる。

⑤ルカは、4回記録している。

＊6 : 1～5、6～11、13 : 10～17、14 : 1～6

(2) イエス時代のユダヤ教では、安息日が最も重要な律法であった。

①ソフリム学派の教え

「神は、なぜイスラエルを創造したのか」

「それは、イスラエルに安息日を守らせるためである」

「すべてのユダヤ人が一回でも安息日を完全に守ったなら、メシアが来られる」

②自分はメシアだと主張するイエスが、安息日を守らないのはおかしい。

2. アウトライン

(1) 麦の穂を摘んで食べる弟子たち

(2) パリサイ人の糾弾

(3) イエスの応答

3. 結論

(1) 律法に関する誤解

(2) 新約時代の信者と安息日

安息日論争の内容と背景について学ぶ。

I. 麦の穂を摘んで食べる弟子たち

1. 1 節

Luk 6:1 ある安息日に、イエスが麦畑を通っておられた時のことである。弟子たちは穂を摘んで、手でもみながら食べていた。

- (1) 麦の収穫時期は、春から夏にかけてである。
 - ①大麦が先で、小麦がその後に収穫期を迎える。
 - ②ここでの麦が大麦か小麦か、判断は難しい。
- (2) 普通なら問題にならないことが、安息日なので問題視される。
 - ①イエスの一行は、麦畑を通っていた。
 - ②弟子たちは、ひもじくなった（マタ 12：1）。
 - ③そこで彼らは、穂を摘んで、手でもみながら食べていた。
- (3) 彼らは、すべてを捨ててイエスに従った。
 - ①マタ 8：20

Mat 8:20 イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には枕するところ也没有ありません。」

- ②弟子たちが空腹であったのは、この時だけではないだろう。
- ③これは、イエスに従ったがゆえのひもじさである。

- (4) モーセの律法の規定（申 23：24～25）

Deu 23:24 隣人のぶどう畑に入ったとき、あなたは思う存分、満ち足りるまでぶどうを食べてもよいが、あなたのかごに入れてはならない。

Deu 23:25 隣人の麦畑の中に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑で鎌を使ってはならない。

- ①弟子たちの行為自体は、律法違反ではない。
- ②しかし、安息日にこれを行なったので、「口伝律法違反」となった。

II. パリサイ人の糾弾

1. 2 節

Luk 6:2 すると、パリサイ人のうちの何人かが言った。「なぜあなたがたは、安息日にはしてはならないことをするのですか。」

- (1) パリサイ人たちは、口伝律法に基づいて、弟子たちを糾弾した。
 - ①ルカは、弟子たちを中心に描いている。
 - ②後にイエスは、弟子たちを擁護する師として登場する。
 - ③パリサイ人たちは、イエスの言動を見張っていた。
 - *学ぼうという態度ではなく、欠点を見つけようという態度である。
 - *信頼ではなく、反抗である。

(2) 律法学者たちは、安息日に行ってはならない主な労働 39 種類を列挙した。

- ①39 種類の主な労働のそれぞれをさらに細分化した。
- ②その結果、1500 種以上の労働が禁じられた。
- ③ミシュナの中の「シャバット 7 : 2」にその規定がある。

(3) イエスと弟子たちは、4 種類の違反に犯した。すべて主な労働に該当する。

- ①麦の穂を摘むことは、収穫に当たる。
- ②手でもみ出すことは、脱穀に当たる。
- ③息を吹きかけることは、もみ殻の選別に当たる。
- ④麦を食べることは、貯蔵に当たる。

(4) 口伝律法には、安息日に草の上を歩いてはいけないという規定さえあった。

- ①目に見えない麦を、足で踏む可能性がある。これは収穫である。
- ②麦ともみ殻が分離する可能性がある。これは脱穀である。
- ③足が風を巻き上げ、もみ殻を飛ばす可能性がある。これはもみ殻の選別である。
- ④鳥が来て、その麦を食べる可能性がある。これは貯蔵である。

Ⅲ. イエスの応答

1. 3～4 節

Luk 6:3 イエスは彼らに答えられた。「ダビデと供の者たちが空腹になったとき、ダビデが何をしたか、

Luk 6:4 どのようにして、神の家に入り、祭司以外はだれも食べてはならない臨在のパンを取って食べ、供の者たちにも与えたか、読んだことがないのですか。」

(1) 臨在のパン (レビ 24 : 5～7)

Lev 24:5 あなたは小麦粉を取り、それで輪形パン十二個を焼く。一つの輪形パンは十分の二エパである。

Lev 24:6 それを【主】の前のきよい机の上に一列六つずつ、二列に置く。

Lev 24:7 それぞれの列に純粋な乳香を添え、覚えの分のパンとし、【主】への食物のささげ物とする。

①聖所の中に2列に置かれた12個のパンで、イスラエル12部族を象徴している。

②臨在のパンは、神とイスラエルの交わりを象徴している。

(2) 安息日に新しいパンを置く (レビ 24 : 8)。

Lev 24:8 彼は安息日ごとに、これを【主】の前に絶えず整えておく。これはイスラエルの子らによるささげ物であって、永遠の契約である。

①祭司は、安息日ごとに、新しいパンと交換した。

(3) 祭司の食べ物となる（レビ 24 : 9）。

Lev 24:9 これはアロンとその子らのものとなり、彼らはこれを聖なる所で食べる。これは最も聖なるものであり、【主】への食物のささげ物のうちから、永遠の定めにより彼に与えられた割り当てだからである。」

①古いパンは、祭司たちが食べた。

②これは、「最も聖なるもの」と呼ばれた。

③永遠の定めによりアロンとその子らに割り当てられたものである。

(4) ダビデのエピソード（1 サム 21 : 1～6）

1Sa 21:1 ダビデはノブの祭司アヒメレクのところに来た。アヒメレクは震えながら、ダビデを迎えて言った。「なぜ、お一人で、だれもお供がいないのですか。」

1Sa 21:2 ダビデは祭司アヒメレクに言った。「王は、あることを命じて、『おまえを遣わし、おまえに命じたことについては、何も人に知らせてはならない』と私に言われました。若い者たちとは、しかじかの場所で落ち合うことにしています。

1Sa 21:3 今、お手もとに何かあったら、パン五つでも、ある物を下さい。」

1Sa 21:4 祭司はダビデに答えて言った。「手もとには、普通のパンはありません。ですが、もし若い者たちが女たちから身を遠ざけているなら、聖別されたパンはあります。」

1Sa 21:5 ダビデは祭司に答えて言った。「実際、私が以前戦いに出て行ったときと同じように、女たちは私たちから遠ざけられています。若い者たちのからだは聖別されています。普通の旅でもそうですから、まして今日、彼らのからだは聖別されています。」

1Sa 21:6 祭司は彼に、聖別されたパンを与えた。そこには、温かいパンと置き換えるために、その日【主】の前から取り下げられた、臨在のパンしかなかったからである。

①祭司アヒメレクのもとには、臨在のパンしかなかった。

②それは、温かいパンと置き換えるために聖所から取り下げられたものであった。

③彼は、ダビデとその従者たちに、祭司しか食べてはならないパンを与えた。

(5) イエスによるモーセの律法の解説

①律法の中には恵みの要素がある。

②律法主義は、律法の精神を反映させたものではない。

③いくら律法に精通していても、律法の精神を理解していないことがある。

④もし安息日の規定を正しく理解したなら、いのちの維持を重視するはずである。

(6) イエスとダビデの対比

- ①ともに、拒否された状態にあった。
- ②ともに、従者を連れていた。
- ③ともに、ひもじかった。
- ④ダビデと従者たちは、いのちを維持するために、「聖別されたパン」を食べた。
- ⑤ダビデの時代には口伝律法はなかったという言い訳は成り立たない。
- ⑥パリサイ人の教えでは、モーセは口伝律法も神から受けたことになっていた。
- ⑦イエスは、ダビデ以上のお方、「ダビデの子」である。

2. 5 節

Luk 6:5 **そして彼らに言われた。「人の子は安息日の主です。」**

(1) 三段論法

- ①安息日は、神が命じたものである。
- ②イエスは、安息日の律法を超えるお方である。
- ③それゆえ、イエスは神である。

結論

1. 律法に関する誤解

- (1) 律法は、良いものである。
- (2) 悪いのは、律法の誤った適用や口伝律法に基づく律法主義である。
- (3) イエスは、安息日の意味を説明し、それを完成するために来られた。
- (4) いのちの維持は、すべての律法より優先すべきものである。
- (5) 自分はパリサイ人とは無関係だと思った瞬間、この箇所は適用を失う。
- (6) 私たちの内に律法主義の傾向がないかどうか、吟味する必要がある。
- (7) 律法主義とは、見かけをよくするために、ある種の行動を規制することである。
- (8) 律法主義とは、人間のいのちの尊厳に制限を加えるものである。
- (ILL) 赤信号で停まっている車の背後から、暴走するトラックが近づいてきた。

2. 新約時代の信者と安息日

- (1) 安息日は、今も土曜日である。
- (2) クリスマンは、モーセの律法ではなく、キリストの律法のもとにある。
- (3) クリスマンにとっては、毎日が安息日である。
- (4) 私たちはやがて、永遠の安息に入るようになる。

①2 テサ 1 : 4~7

2Th 1:4 **ですから私たち自身、神の諸教会の間であなたがたを誇りに思っています。あなたがたはあらゆる迫害と苦難に耐えながら、忍耐と信仰を保っています。**

2Th 1:5 それは、あなたがたを神の国にふさわしいものと認める、神の正しいさばきがあることの証拠です。あなたがたが苦しみを受けているのは、この神の国のためです。

2Th 1:6 神にとって正しいこととは、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、

2Th 1:7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えることです。このことは、主イエスが、燃える炎の中に、力ある御使いたちとともに天から現れるときに起こります。

ルカの福音書 26 回

右手の萎えた人の癒し

ルカ 6 : 6～11

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①この時期、イエスは公生涯の重要な時期に入っていた。
- ②口伝律法に関して、パリサイ人たちとの論争が始まる。
- ③福音書の中には、安息日論争が 7 回出てくる。
- ④ルカは、4 回記録している。

*6 : 1～5 弟子たちが麦の穂を摘んで食べた。

*6 : 6～11 イエスは、右手の萎えた人を癒した。

*13 : 10～17 イエスは、腰が曲がった女を癒した。

*14 : 1～6 イエスは、水腫をわずらっている人を癒した。

(2) イエス時代のユダヤ教では、安息日が最も重要な律法であった。

- ①パリサイ人たちは、安息日にほぼすべての活動を禁じた。
- ②自分たちは、都合良く生きていた。
- ③自分はメシアだと主張するイエスが、安息日を守らないのはおかしい。

(3) 安息日に関する最近のニュース

①2018 年 11 月 エルアル航空のトラブル

ニューヨークを木曜に出発予定だったエルアル航空便が、乗員の交通が問題で 5 時間も出発が遅延し、安息日前に到着できない事態に。宗教派の乗客が飛行機から降りると言い、さらに出発が遅れた。

②2019 年 3 月 腎臓移植を受ける男性

超正統派の男性が腎臓移植を受ける順番が来たが、安息日で電話に出ないため移植責任者の女性が夫の警官に相談。警察がパトカーで男性を自宅から病院に搬送する珍事態に。手術は成功したという。

③2019 年 11 月 公共交通機関の運行

テルアビブ市議会が、安息日の公共交通機関の運行計画を承認。市役所前では小規模な抗議デモ。

④2021 年 11 月 子ども用ワクチン到着

子ども用のワクチン 100 万回分が土曜に到着したのは安息日違反だとして、ユダヤ人の子供に接種するのを禁じると、超正統派のホタ師が宣言。政府は意図的に

安息日を破っており、冒瀆だと非難した。

(4) 安息日はユダヤ教の重要な戒律であり、習慣である。

①しかし、誤用すると弊害が出て来る。

(5) 安息日論争のテーマ

①祭儀的律法と人間の必要とは、どちらが重要か。

②イエスは、安息日の主である。

2. アウトライン

(1) 毘を仕掛ける宗教的指導者たち（6～7 節）

(2) 論争を仕掛けるイエス（8～10 節）

(3) 癒しの結果（11 節）

3. 結論：自問自答すべき項目

2 番目の安息日論争について学ぶ。

I. 毘を仕掛ける宗教的指導者たち（6～7 節）

1. 6 節

Luk 6:6 別の安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに右手の萎えた人がいた。

(1) これは、別の安息日に起きた出来事である。

①ルカは、ここでも、イエスの教えを癒し以上に強調している。

(2) 会堂に右手の萎えた人がいた。

①ルカの医者としての視点が反映されている。「右手の萎えた人」。

②この人の状態は、深刻であった（ほとんどの人は、右手が利き腕である）。

③律法学者たちやパリサイ人たちが、この人をそこに置いたのであろう。

2. 7 節

Luk 6:7 律法学者たちやパリサイ人たちは、イエスが安息日に癒やしを行うかどうか、じつと見つめていた。彼を訴える口実を見つけるためであった。

(1) 宗教的指導者たちは、イエスを訴える口実を見つけようとしていた。

①過去の観察から、イエスが安息日に癒しを行うことは予想された。

②癒しを行えば、安息日違反でイエスを訴えることができる。

(2) 現代のハラハー

①安息日に命を救うのは、義務である。

②重病の人を治療するのは、制限付きで許可される。

*イエス時代でも、命にかかわる場合は治療してもよいとされていた。

③その他の病気は、治療してはならない（薬を用意するのは労働である）。

*右手の萎えた人の癒しは、現代のハラハーでも、許可されない。

II. 論争を仕掛けるイエス（8～10 節）

1. 8 節

Luk 6:8 イエスは彼らの考えを知っておられた。それで、手の萎えた人に言われた。「立って、真ん中に出なさい。」その人は起き上がり、そこに立った。

(1) イエスは、彼らの考えを知っておられた。

①5 : 22

Luk 5:22 イエスは彼らがあれこれ考えているのを見抜いて言われた。「あなたがたは心の中で何を考えているのか。」

②イエスは、預言者である。

③イエスは、神の子である。

(2) イエスが先に論争を仕掛けた。

①イエスは、その人に「立って、真ん中に出なさい」と命じた。

②その人は、その命令に従った。

③人々の関心が、これから起ころうとしていることに向けられた。

2. 9 節

Luk 6:9 イエスは彼らに言われた。「あなたがたに尋ねますが、安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか。いのちを救うことですか、それとも滅ぼすことですか。」

(1) イエスは2つの質問を投げかけた。

①最初の質問

「安息日に律法にかなっているのは、善を行うことですか、それとも悪を行うことですか」

*安息日に善を行うことは、律法に適っている。

*安息日に悪を行うことは、律法に適っていない。

②次の質問

「いのちを救うことですか、それとも滅ぼすことですか」

*安息日にいのちを救うことは、律法に適っている。

*安息日にいのちを滅ぼすことは、律法に適っていない。

*この場合の「いのちを救う」とは、霊的救いではなく、肉体的癒しである。

(2) 宗教的指導者たちは、その質問に答えなかった。

①当然の答は、「安息日に善を行うことは、律法に適っている」である。

②そう答えれば、イエスが癒しを行うことを承認したことになる。

3. 10 節

Luk 6:10 そして彼ら全員を見回してから、その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。そのとおりにすると、手は元どおりになった。

(1) イエスは構わずに、善を行われる。

①彼ら全員を見回した（宗教的指導者たちと対決された）。

②その人に「手を伸ばしなさい」と言われた。

③イエスのことばには、癒しの力がある。

(2) その人は、イエスの命令に従った。

①そのとおりにすると、手はもとどおりになった。

②彼の内には、信仰が見られる。

(3) イエスはことばを発しただけで、何も行動を起こしていない。

①宗教的指導者たちは、イエスを安息日違反で訴えることができない。

②イエスが預言者であること、また、神であることが証明された。

Ⅲ. 癒しの結果 (11 節)

1. 11 節

Luk 6:11 彼らは怒りに満ち、イエスをどうするか、話し合いを始めた。

(1) イエスは、安息日の律法を犯すことなく、2つのことを同時に行った。

①宗教的指導者たちを辱めた。

②右手の萎えた人を癒した。

(2) 宗教的指導者たちの反応は、怒りであった。

①ここからイエスに対する殺意が生まれた。

(3) ルカ 5 : 12～6 : 11

- ①宗教的指導者たちとの論争の始まり
- ②6 : 11 は、このセクションのまとめである。
- ③イエスが十字架に架けられる約 2 年前の出来事である。
- ④マタとマコでは、イエス殺害の方法を相談し始めたとある。

結論：自問自答すべき項目

1. 彼らは、苦しんでいる人を解放するよりも、口伝律法を守ることを優先させた。

- (1) 安息日の律法が、いのちを生かすために与えられていることを理解しなかった。
- (2) 安息日の律法は、神の愛と深く関連している。
- (3) 神の愛を表現する方法は、隣人愛の実践である。
- (4) 私たちは、神への愛と隣人への愛を最も重視しているだろうか。

2. 彼らの信仰は否定的、後ろ向きであった。

- (1) 彼らは、律法の細部にこだわり、律法に違反しないことだけを考えていた。
- (2) イエスの信仰は肯定的で、前向きであった。
 - ①愛の実践
 - ②困っている人の救助
- (3) 私たちは、「〇〇をすべきでない」という思いだけに囚われていないだろうか。

3. 彼らは、自分たちの信仰だけが正しいと確信していた。

- (1) 彼らは、イエスの教えを受け入れることができなかった。
- (2) 私たちは、キリスト教の生命力のほんの一部しか理解していない。
- (3) クリスマンとして成長する余地は、常にある。
- (4) 私たちは、自分の信仰や自分の教会の信仰がすべてであると思っていないか。

ルカの福音書 27 回

12 使徒の選抜

ルカ 6 : 12～16

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカ 4 : 14～5 : 11 イエスの奉仕の概観
- ②ルカ 5 : 12～6 : 11 敵（パリサイ人たち）との関係
- ③ルカ 6 : 12～49 弟子たちとの関係
 - *12 使徒の紹介
 - *彼らに対する教えの要約

(2) 12 使徒のリストは、4 か所に出ている。

- ①マコ 3 章、マタ 10 章、ルカ 6 章、使 1 章
- ②同名の者、別名を持つ者などがいて、かなり難解である。

(3) 使徒たちのリストを理解するためのヒント

- ①4 人 1 組である。
- ②ペテロは常に最初に出て来る。
- ③ピリポ（5 番目）、ヤコブ（9 番目）は、同じ位置に登場する（各組のリーダー）。
- ④1 組目の 3 人（ペテロ、ヤコブ、ヨハネ）は、イエスに近い位置にある。

2. アウトライン

- (1) 12 使徒選抜の経緯（12～13 節）
- (2) 1 組の 4 人（14 節 a）
- (3) 2 組の 4 人（14b～15 節 a）
- (4) 3 組の 4 人（15b～16 節）

3. 結論

- (1) 12 という数字
- (2) 多様性のある人材

12 使徒の選抜について学ぶ。

I. 12 使徒選抜の経緯（12～13 節）

1. 12 節

Luk 6:12 そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。

(1) この祈りは、宗教的指導者たちとの論争に続くものである。

- ①敵対者が増える中で、次に何をすべきかを祈り求めた。
- ②神に対するイエスの全的信頼が表現されている。
- ③これほど長時間の祈りが記録されているのは、この箇所だけである。
*イエスの公生涯は、重要な局面を迎えていた。

(2) 山（丘）に行った理由

- ①そこは、祈りに必要な静寂が得られる場所である。
- ②高い場所なので、神に近いという感覚を持つことができる。

2. 13 節

Luk 6:13 そして、夜が明けると弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をお与えになった。

(1) 祈りによって答えが与えられた。

- ①イエスは、弟子集団の中から 12 人を選んだ。
- ②弟子とは、ラビから学ぶ生徒たちである。

(2) イエスは、彼らに使徒という名を与えた。

- ①使徒とは、権威を付与されて、派遣される者である。
- ②弟子は師のもとに来るが、使徒は師から派遣される。

II. 1 組の 4 人 (14 節 a)

1. 14 節 a

Luk 6:14a すなわち、ペテロという名を与えられたシモンとその兄弟アンデレ、そしてヤコブ、ヨハネ、

(1) ペテロという名を与えられたシモン

- ①使徒集団の指導者であり、スポークスマンである。
- ②最初にイエスをメシアと認めた使徒である（ルカ 9：20）。
- ③イエスを 3 度否んだ。
- ④イエスの復活を最初に目撃した使徒である。
- ⑤最も激しくイエスを拒否した人が、最初にイエスの復活を目撃した。
*神の赦しと恵みの表れである。

(2) その兄弟アンデレ

- ①12 使徒のリスト (4 種類ある) の中では、必ず最初の 4 人に入っている。
- ②12 使徒の中で、アンデレがイエスの最初の弟子になった。
- ③兄のシモン・ペテロをイエスのもとに連れて来た。
- ④弁当を持っている少年をイエスに紹介した。
- ⑤ギリシア人たちをイエスに紹介した (ヨハ 12 : 20~22)。
 - *アンデレは、異邦人伝道の先駆けとなった。

(3) ヤコブと (4) ヨハネ

- ①ゼベダイの子たちであり、漁師であった。
- ②母サロメは、マリアの姉妹 (マタ 27 : 56、マコ 15 : 40、ヨハ 19 : 25 参照)。
- ③ヤコブとヨハネは、イエスの従兄弟に当たる。
- ④彼らは、サマリヤの町に火を呼び下そうとした (ルカ 9 : 51~56)。
- ⑤彼らは、御国での地位を求めた (マコ 10 : 35~41)。
- ⑥イエスの側近 3 人の中にいて、3 つの重要な出来事を目撃した。
 - *ヤイロの娘の蘇生 (マコ 5 : 37、ルカ 8 : 51)
 - *イエスの変貌 (マタ 17 : 1、マコ 9 : 2、ルカ 9 : 28)
 - *ゲツセマネの園での祈り (マタ 26 : 37、マコ 14 : 33)
- ⑧ヤコブは、使徒たちの中で最初の殉教者となった。
- ⑨ヨハネは、晩年にパトモス島に流され、そこで黙示録を書いた。

Ⅲ. 2 組の 4 人 (14b~15 節 a)

1. 14b~15 節 a

Luk 6:14b ピリポ、バルトロマイ、

Luk 6:15a マタイ、トマス、

(1) ピリポ

- ①彼は、イエスに招かれて弟子となった。
- ②彼は、ナタナエルにイエスを紹介した (ヨハ 1 : 45)。
 - *ピリポとナタナエルは、同時に出て来ることが多い。
- ③5000 人のパンの奇跡の場面では、頭を働かせた。
 - *200 デナリのパンでは足りません (ヨハ 6 : 5~7)。
- ④ギリシア人訪問では、アンデレに情報を伝え、いっしょにイエスに話した。
- ⑤最後の晩餐の場面では、「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します」と言った (ヨハ 14 : 8~9)。

(2) バルトロマイ

- ①ヨハネの福音書では、ナタナエルという名で登場する。
- ②福音書に彼が登場するのは、2箇所だけである。
- ③イエスから「ほんとうのイスラエル人だ」と言われた（ヨハ 1：46～51）。
- ④ガリラヤ湖畔で、復活のイエスと出会った（ヨハ 21：1～2）。

(3) マタイ

- ①彼は、バプテスマのヨハネの弟子ではなかった。
- ②取税人レビであるが、ここではマタイとなっている。
- ③カペナウムで関税（通行税）を徴収する取税人であった。
- ④イエスから招かれ、すぐに従った。
- ⑤イエスを歓迎する宴会を催した。
- ⑥マタイの福音書の著者となった。

(4) トマス

- ①彼もまた、バプテスマのヨハネの弟子ではなかった。
- ②双子という意味である（彼には双子の兄弟がいたのであろう）。
- ③ギリシア語でデドモという。
- ④トマスは、「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか」と言った。
- ⑤彼は、イエスの復活を疑った。
「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」
- ⑥8 日目に復活のイエスが現れ、トマスは、「私の主。私の神」と叫んだ。

IV. 3 組の 4 人 (15b～16 節)

1. 15b～16 節

Luk 6:15b アルパヨの子ヤコブ、熱心党员と呼ばれていたシモン、

Luk 6:16 ヤコブの子ユダ、イスカリオテのユダで、このユダが裏切る者となった。

(1) アルパヨの子ヤコブ

- ①ゼベダイの子ヤコブとは別人
- ②4つのリストの中で、常に9番目に登場する。
*3組目のリーダーである。
- ③イエス召天後、エルサレムの屋上の間に集った（使 1：13）。
- ④これ以外に情報はない。

(2) 熱心党员シモン

- ①政治的には、極右である。今でいうテロリストである。
- ②ガリラヤ人ユダの抵抗運動が、熱心党の始まりとなった。
- ③武力によってメシア預言の成就を早めようとした点に問題があった。
- ④シモンは、熱心党の革命運動から手を引き、イエスの神の国運動に参加した。

(3) ヤコブの子ユダ

- ①彼には、3つの呼び名がある。

＊ヤコブの子ユダ

＊イスカリオテでないユダ (ヨハ 14 : 22)

＊タダイ (マコ 3 : 18、マタ 10 : 3)

(4) イスカリオテのユダ

- ①唯一、ガリラヤ出身ではない。ユダヤ地方のカリオテ出身である。
- ②ルカは、「このユダが裏切る者となった」と記している。

結論

1. 12 という数字

- (1) イスラエル 12 部族との継続性が暗示されている。
- (2) しかし、イスラエル 12 部族との断絶性もある。
- (3) ルカは、12 使徒の選抜が教会設立の重要なステップであることを意識している。

①12 使徒は、イエスの死、埋葬、復活の証人となる。

②福音書に使徒という呼び名が出てくる回数

＊マタイ 1 回 (10 : 2)

＊マルコ 2 回 (3 : 14、6 : 30)

＊ヨハ 0 回

＊ルカ 6 回 (6 : 13、9 : 10、11 : 49、17 : 5、22 : 14、24 : 10)

③使徒の働きに入ると、使徒という呼び名が 28 回出てくる。

④イエスが始めた人類救済の御業が、使徒たちによって継続されていく。

⑤使 1 : 1~2

Act 1:1 テオフィロ様。私は前の書で、イエスが行い始め、また教え始められたすべてのことについて書き記しました。

Act 1:2 それは、お選びになった使徒たちに聖霊によって命じた後、天に上げられた日までのことでした。

⑥使徒たちの選びが、今の私たちにも影響を与えている。

⑦神から与えられている召しを軽視してはならない。

2. 多様性のある人材

(1) 全員がペテロのようにないことに感謝すべきである。

(2) 12 使徒は、人類全体の代表例である。

(3) 彼らには、共通点があった。

①イエスとの親密な関係

②イエスに対する献身

③20 代の若者

④教えられやすい

(4) イエスは、量よりも質を重視された。

①彼らを訓練し、彼らを通して全人類を救おうとされた。

(5) 彼らは、教会の土台となった。

①エペ 2 : 20～22

Eph 2:20 使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。

Eph 2:21 このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。

Eph 2:22 あなたがたも、このキリストにあって、ともに築き上げられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

(6) クリスマンひとりひとりが、建物の全体を形成する材料である。

ルカの福音書 28 回

大群衆への奉仕

ルカ 6 : 17～19

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスは、山に行き、神に祈りながら夜を明かされた（6 : 12）。
- ②朝になると弟子たちを呼び寄せ、その中から 12 人を選ばれた（6 : 13）。
- ③それから山を下り、平らなところに立たれた（6 : 17）。
- ④そこに大群衆が押し寄せてきたので、彼らに奉仕をされた（6 : 17）。
- ⑤この箇所は、「平地での説教」のイントロダクションである。

(2) 山上の垂訓（マタ 5～7 章）との比較

- ①「山の上」と「平らなところ」（平地）という違いがある。
- ②説教の始まりと終わりが、似ている。
- ③山上の垂訓には祝福のことばはあるが、呪いのことばはない。
- ④聴衆はともに弟子たちであるが、群衆も聞いている。
- ⑤マタイは律法に関する教えを含めているが、ルカはそれを省いている。

＊ルカは、異邦人とは無関係の情報を省いている。

- ⑥マタイとルカは、基本的には同じ内容を取り上げている。

- ⑦3 つの異なる見解がある。

＊同じ説教をマタイは詳細に（137 節）、ルカは要約して（30 節）記録した。

＊マタイの説教とルカの説教は、別のものである。

＊多数の説教があり、それをマタイとルカは、それぞれの視点で編集した。

2. アウトライン

- (1) 平地での説教の背景（17～19 節）
- (2) 歴史的文脈
- (3) 宗教的文脈
- (4) 公生涯の文脈

3. 結論：平地での説教と私たちの関係

大群衆への奉仕について学ぶ。

I. 平地での説教の背景（17～19 節）

1. 17 節

Luk 6:17 それからイエスは彼らとともに山を下り、平らなところにお立ちになった。大勢の弟子たちの群れや、ユダヤ全土、エルサレム、ツロやシドンの海岸地方から来た、おびただしい数の人々がそこにいた。

(1) イエスは 12 使徒たちとともに山を下り、平地に立った。

①そこで語られたので、「平地での説教」と呼ばれる。

(2) おびただしい数の人々がそこにいた。

①大勢の弟子たちの群れ

②南部（ユダヤ全土とエルサレム）から来た人たち（ユダヤ人）

③ツロやシドンの海岸地方から来た人たち（異邦人）

2. 18 節

Luk 6:18 彼らはイエスの教えを聞くため、また病気を治してもらうために来ていた。汚れた霊に悩まされていた人たちも癒やしてもらっていた。

(1) 彼らが来た目的

①イエスの教えを聞くため（ルカの強調点）

＊信仰は、聞くことから始まる。

②病気を治してもらうため

③悪霊を追い出してもらうため

(2) イエスの聴衆

①第一義的には、イエスは弟子たちに語った。

②そこに民衆もいて、聞いていた。

③イエスは、信仰のない人たちにも「弟子道」について語った。

3. 19 節

Luk 6:19 群衆はみな何とかしてイエスにさわろうとしていた。イエスから力が出て、すべての人を癒やしていたからである。

(1) 群衆は、なんとかしてイエスにさわろうとしていた。

①イエスから力が出て、すべての人を癒やしていた。

②聖霊の力が、イエスを通して流れ出ている。

(2) イエスは、助けを求めて来るすべての人を癒した。

①公生涯のこの時期、最も活発に癒しが行われた。

- ②これらの癒しは、イエスのメシア性を証明する「しるし」である。

II. 歴史的文脈

1. 中間時代が終わった直後の時代

- (1) 旧約聖書と新約聖書の間の約 350 年間

- ①非常に重要な時代であるが、一般的にその重要性は認識されていない。
- ②アレクサンドロスの世界征服によりギリシア語が普及した。
- ③ヘブル語聖書は、ギリシア語に翻訳された（70 人訳。LXX）。

2. メシア待望が高まった時代

- (1) 民衆は、ローマの圧制によって苦しめられていた。

- ①ローマの圧制から自分たちを解放してくれるメシアの到来を待ち望んでいた。
- ②メシア的王国の樹立を待ち望んでいた。
- ③ダビデ時代の再来を待ち望んでいた。

III. 宗教的文脈

1. 律法の時代から恵みの時代への移行期

- (1) ディスペンセーション主義者でなくとも、律法の時代と恵みの時代を区別する。

- ①その区別がないなら、今でもモーセの律法を実行せねばならないことになる。
- ②食物規定や衣服の規定が、今も有効だということになる。
- ③レビ 19 : 27

Lev 19:27 あなたがたの頭のもみあげを剃り落としてはならない。ひげの両隅を損なってはならない。

- ④クリスチャンでも、モーセの律法の適用に関して混乱している人が多くいる。

- (2) 律法の時代とは、モーセの律法が機能している時代である。

- ①イスラエルの民は、モーセの律法に従って生きるように命じられていた。
- ②民衆は、パリサイ的律法（口伝律法）に縛られていた。
- ③過去数百年の間に発展した口伝律法が、民衆の日常生活を縛っていた。
- ④彼らは、メシアがパリサイ的律法による義を認めてくれることを期待していた。

2. 恵みの時代は、メシアの死とともに始まる。

- (1) 平地での説教が語られたときは、まだ律法の時代であった。

- ①従って、この説教は、恵みの時代について教えたものではない。
- ②この説教の内容は、メシアによるモーセの律法の正しい解釈である。

(2) 恵みの時代とは、新しい契約が機能している時代である。

①新しい契約の預言は、エレ 31 : 31～37 に出てくる。

Jer 31:31 見よ、その時代が来る——【主】のことば——。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。

Jer 31:32 その契約は、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破った——【主】のことば——。

Jer 31:33 これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである——【主】のことば——。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

②信仰による義を得た者は、心に記された愛の律法によって生きようになる。

(3) この説教で、イエスは 2 つのことを否定された。

①パリサイ人によるモーセの律法の解釈と、口伝律法の教えを、否定された。

②口伝律法を行うことによって義とされるという教えを、否定された。

IV. 公生涯の文脈

1. イエスは、旧約聖書の預言の成就として来られた。

(1) イエスは、モーセの律法の教えに従って生活された。

①この時代、モーセの律法は、依然として有効であった。

②イエスは、自分がメシアであることを民衆に示しておられた。

③イスラエルの民は、イエスのメシア性を拒否するまでには至っていない。

2. この説教が語られたタイミング

(1) イエスに対する興味が、非常に高まった時期である。

①イスラエルだけでなく、異邦人の地域からも人々が集まって来た。

(2) 12 使徒が選抜された直後に語られた。

①イエスは、12 使徒と弟子たちに向けてこの説教を語られた。

②彼らはすでに、信仰によって義とされていた。

結論：平地での説教と私たちの関係

1. 現代のクリスチャンに適用すべきものではない。

(1) もしそうなら、私たちは、613 のモーセの律法を実行せねばならなくなる。

(2) ただし、平地での説教の中には、新約時代の律法に登場する要素もある。

①新約時代の律法とは、「キリストの律法」（ガラ 6：2）のことである。

2. 救いの道を示したものではない。

(1) もしそれが救いの道を示したものであるなら、業による救いが可能となる。

(2) 人が救われるのは、いつの時代でも、信仰と恵みによる。

(3) この時代は、イエスをメシアとして信じるのが信仰の内容である。

(4) 祝福のことばは、信仰による義を獲得した人たちに向けられたものである。

3. 律法の義に関するメシアの解釈である。

(1) パリサイ人による律法の義の解釈との対比がある。

①パリサイ人は、律法の外面的な服従にこだわった。

②イエスは、内面的服従と外面的服従の両方を強調した。

4. 恵みの時代の信仰の内容

(1) 人は、福音の 3 要素を受け入れ、イエスに信頼を置いて救われる。

(2) 私たちの内には、神の作品を改善しようとする性質がある。

①何かを付け加えようとする。

②これは、改悪どころか、福音の破壊である。

(3) 付加物なしに、福音をそのまま受け入れる人だけが、神によって義とされる。

ルカの福音書 29 回

4 つの祝福と 4 つの呪い

ルカ 6 : 20～26

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスは、山に行き、神に祈りながら夜を明かされた（6 : 12）。
- ②朝になると弟子たちを呼び寄せ、その中から 12 人を選ばれた（6 : 13）。
- ③それから山を下り、平地に立たれた（6 : 17）。
- ④そこに大群衆が押し寄せてきたので、彼らに奉仕をされた（6 : 17）。
- ⑤弟子たちに向けて「平地での説教」を語られた（6 : 20）。

(2) 山上の垂訓（マタ 5～7 章）との違い

- ①「山の上」と「平地」という違いがある。
- ②「平地での説教」には、4 つの祝福と 4 つの呪いがある。
- ③「平地での説教」には、モーセの律法に関する教えはない。
- ④「山上の垂訓」と「平地での説教」の関係について、3 つの見解がある。

＊同じ説教をマタイは詳細に（137 節）、ルカは要約して（30 節）記録した。

＊マタイの説教とルカの説教は、別のものである。

＊多数の説教があり、それをマタイとルカは、それぞれの視点で編集した。

2. アウトライン

- (1) 4 つの祝福（20～23 節）
- (2) 4 つの呪い（24～26 節）

3. 結論：2 つの道

- (1) 詩篇 1 篇
- (2) 私たちへの適用

弟子としての 2 つの道について学ぶ。

I. 4 つの祝福（20～23 節）

1. 貧しい人たち（20 節）

Luk 6:20 イエスは目を上げて弟子たちを見つめながら、話し始められた。「貧しい人たちは幸いです。神の国はあなたがたのものだからです。」

- (1) この説教は、弟子たちに向けて語られたものである。

- ①群衆もそこにいて、同じ説教を聞いていた。
- ②未信者には配慮が必要である。
(ILL)「聖会で、きよめの恵みに与りました」という証し
- ③私は、未信者がいても、配慮した上で、大胆に語るべきだと思っている。

(2) ここでの貧しさは、物質的なものである。

- ①弟子たちは、イエスに従うためにこの世の富を捨てた。
- ②献身のために貧しくなった弟子たちは、神にのみ信頼するようになる。

(3) マタ 5 : 3

Mat 5:3 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」

- ①これは、内面的な貧しさである。
- ②自分の義に信頼を置いていない人のことである。
- ③弟子たちの献身の根底には、心の貧しさがある。

(4) 弟子として貧しくなった者には、神からの祝福が約束されている。

- ①メシア的王国での祝福が待っている。
- ②現世で裕福になるよりは、メシア的王国の祝福に与るほうが良い。
- ③弟子たちにとっては、メシア的王国の成就是、現実的なものであった。

2. 飢えている人たち (21 節 a)

Luk 6:21a 今飢えている人たちは幸いです。あなたがたは満ち足りるようになるからです。

(1) イエスの弟子たちは、時には飢えることもある。

- ①イエス時代だけでなく、今も同じことが言える。
(ILL) 神学生時代、開拓伝道の時代

(2) マタ 5 : 6

Mat 5:6 義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです。

- ①ここでは、霊的な意味で、飢え渴きということばが使用されている。
- ②聖い生活への渴望、完全な基準に基づいて生きたいという願い
- ③マタイ 5 章の文脈では、モーセの律法が完全な基準である。

(3) 飢えている弟子たちには、神からの祝福が約束されている。

- ①現世における守りがある。
- ②さらに、メシア的王国において、神の祝福が約束されている。

3. 泣いている人たち (21 節 b)

Luk 6:21b 今泣いている人たちは幸いです。あなたがたは笑うようになるからです。

(1) マタ 5 : 4

Mat 5:4 悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです。

(2) 人生で味わうさまざまな悲しみではなく、罪に関する悲しみのことである。

- ①神に対して罪を告白する人
- ②その人は、信仰による義人である。
- ③伝道しても応答する人が少ないことも、悲しみの 1 つである。

(3) 泣いている弟子たちには、神の祝福が約束されている。

- ①これも、最終的には、メシア的王国で成就する約束である。
- ②彼らは、笑うようになる。

4. 迫害されている人たち (22～23 節)

Luk 6:22 人々があなたがたを憎むとき、人の子のゆえに排除し、ののしり、あなたがたの名を悪しざまにけなすとき、あなたがたは幸いです。

Luk 6:23 その日には躍り上がって喜びなさい。見なさい。天においてあなたがたの報いは大きいのですから。彼らの先祖たちも、預言者たちに同じことをしたのです。

(1) イエスをメシアと信じたユダヤ人にとって、迫害は現実的なことであった。

- ①迫害される理由は、イエスに対する信仰である。
- ②「人の子」とは、イエスが「神であり人である」ことを示している。
- ③弟子とは、イエスが「神であり人である」ことを信じて従う人である。

(2) 真の弟子は、常に神の基準によって生きる。

①たとえ迫害が来ても、生き方を曲げない。

＊ルカは、使徒の働きの中で、あらゆる種類の迫害を記録している。

- ②真の弟子は、天における報いを期待して生きる。
- ③真の弟子は、預言者たちも迫害に遭ったことを思い出す。

(3) 2 テモ 3 : 12

2Ti 3:12 キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。

- ①イエスもまた、迫害に遭われた。
- ②イエスの弟子たちも、同じ道を歩む。

II. 4 つの呪い (24～26 節)

1. 富んでいる人たち (24 節)

Luk 6:24 しかし、富んでいるあなたがたは哀れです。あなたがたは慰めをすでに受けているからです。

- (1) 貧しい者たちと富んでいる者たちの対比がある。
 - ①「しかし」ということばは、強意の対比である。
 - ②イエスは、単に裕福な人を批判しているわけではない。
 - ③富を守るために、イエスの弟子としての献身を避ける人のことである。
- (2) 前者は、神が必要を満たしてくださると期待することができる。
 - ①これは、終末的希望である。
 - ②メシア的王国における祝福である。
- (3) 後者は、神の祝福を期待することができない。
 - ①富んでいる者（価値観が倒錯している者）には、神の裁きが下る。

2. 満腹している人たち (25 節 a)

Luk 6:25a 今満腹しているあなたがたは哀れです。あなたがたは飢えるようになるからです。

- (1) 飢えている人たちと満腹している人たちの対比がある。
 - ①満腹すること自体は罪ではないが、そのために献身を避けるなら、問題である。
 - ②一時的なもののために、永遠の祝福を捨てるのは愚かなことである。

3. 笑っている人たち (25 節 b)

Luk 6:25b 今笑っているあなたがたは哀れです。あなたがたは泣き悲しむようになるからです。

- (1) 泣いている人たちと笑っている人たちの対比がある。
 - ①笑うこと自体は罪ではないが、そのために献身を避けるなら、問題である。
 - ②一時的なもののために、永遠の祝福を捨てるのは愚かなことである。
 - ③その人は、泣き悲しむようになる。

4. ほめられている人たち (26 節)

Luk 6:26 人々がみな、あなたがたをほめるとき、あなたがたは哀れです。彼らの先祖たちも、偽預言者たちに同じことをしたのです。

- (1) 迫害されている人とほめられている人の対比がある。

- ①この世は、クリスチャンに対して敵対的である。
- ②この世の価値観と聖書の価値観は、対立する。

(2) もしこの世の人たちから「ほめられている」なら、自己吟味をすべきある。

- ①その人は、弟子としての献身ができていないはずである。
- ②かつては、偽預言者たちがこの世の称賛を受けていた。
- ③この世の称賛を受けている人たちは、偽預言者と同じである。

結論：2 つの道

1. 詩篇 1 篇

(1) 祝された道 (1~3 節)

Psa 1:1 幸いなことよ／悪しき者のはかりごとに歩まず／罪人の道に立たず／嘲る者の座に着かない人。

Psa 1:2 【主】のおしえを喜びとし／昼も夜も そのおしえを口ずさむ人。

Psa 1:3 その人は／流れのほとりに植えられた木。／時が来ると実を結び／その葉は枯れず／そのなすことはすべて栄える。

(2) 呪われた道 (4~6 節)

Psa 1:4 悪しき者は そうではない。／まさしく 風が吹き飛ばす秕殻だ。

Psa 1:5 それゆえ 悪しき者はさばきに／罪人は正しい者の集いに 立ち得ない。

Psa 1:6 まことに 正しい者の道は【主】が知っておられ／悪しき者の道は滅び去る。

2. 私たちへの適用

(1) 詩篇 1 篇は、私たちにどちらの道を選ぶのかと問いかけてくる。

- ①詩篇 1 篇は、詩篇全体のメッセージのイントロダクションである。
- ②詩篇全体は、聖書のメッセージ全体の要約である。

(2) イエスは弟子たちに、どちらの道を選ぶのかと問いかけている。

- ①正しい決断をするための力は、神への絶対的信頼である。
- ②正しい決断をするための力は、終末論的な希望である。
- ③つまり、メシア的王国の希望である。

ルカの福音書 30 回

弟子の行い

ルカ 6 : 27～38

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスは、山に行き、神に祈りながら夜を明かされた（6 : 12）。
- ②朝になると弟子たちを呼び寄せ、その中から 12 人を選ばれた（6 : 13）。
- ③それから山を下り、平地に立たれた（6 : 17）。
- ④そこに大群衆が押し寄せてきたので、彼らに奉仕をされた（6 : 17）。
- ⑤弟子たちに向けて「平地での説教」を語られた（6 : 20）。
- ⑥山上の垂訓（マタ 5～7 章）との違いは、律法に関する教えがないことである。

(2) この箇所では、「弟子の行い」についての教えが語られる。

①山上の垂訓の中心テーマは、「真の義とは何か」である。

*それは、パリサイ人の義にまさる「信仰による義」である。

*それは、内面の義である。

②平地での説教の中心テーマは、「隣人愛」である。

*愛の行いは、その人が義とされていることの証拠である。

*愛の行いは、聖霊の力によって可能となる。

2. アウトライン

(1) 7 つの愛の行為（27～36 節）

(2) 4 つの人生訓（37～38 節）

3. 結論

(1) 7 つの愛の行為（27～36 節）

(2) 4 つの人生訓（37～38 節）

(3) まとめ

弟子の行いについて学ぶ。

I. 7 つの愛の行為（27～36 節）

1. 27 節

Luk 6:27 しかし、これを聞いているあなたがたに、わたしは言います。あなたがたの敵を愛しなさい。あなたがたを憎む者たちに善を行いなさい。

(1) あなたがたの敵を愛しなさい。

- ①愛（アガペ）は、隣人に対して真実な配慮を示すことである。
- ②隣人の状態がどうかは（お返しができなくても）、問題ではない。
- ③イエスの弟子が示す愛は、敵さえも愛する愛である。

(2) あなたがたを憎む者たちに善を行いなさい。

- ①「敵」とは、イエスに対する信仰のゆえに、弟子たちを憎む者である。
- ②その人たちに善を行うのは、聖霊の助けがなければ不可能である。

2. 28 節

Luk 6:28 あなたがたを呪う者たちを祝福しなさい。あなたがたを侮辱する者たちのために祈りなさい。

(3) あなたがたを呪う者たちを祝福しなさい。

- ①祝福するとは、相手の最善を願うことである。
- ②呪うこととは、その対極にある行為である。

(4) あなたがたを侮辱する者たちのために祈りなさい。

- ①ここでの祈りは、侮辱する者の上に神の祝福が下るように求めることである。

3. 29～30 節

Luk 6:29 あなたの頬を打つ者には、もう一方の頬も向けなさい。あなたの上着を奪い取る者には、下着も拒んではいけません。

Luk 6:30 求める者には、だれにでも与えなさい。あなたのものを奪い取る者から、取り戻してはいけません。

(5) 復讐してはならない。

- ①侮辱されても仕返しをしない。
- ②弟子に対する人格攻撃がここでのテーマである。
- ③家族が攻撃された場合は、守る必要がある。
- ④その場合でも、過剰防衛に注意する必要がある。

(6) 気前良く与えなさい。

- ①異邦人世界でよくあった路上での強盗事件が取り上げられている。
- ②上着を奪い取る者がいたなら、下着まで与えればよい。
- ③イエスの弟子は、物質に囚われてはいけない。
- ④ルカ 23 : 34

Luk 23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」彼らはイエスの衣を分けるために、くじを引いた。

4. 31 節

Luk 6:31 人からしてもらいたいと望むとおりに、人にしなさい。

(7) 自分にして欲しいことを、人にしなさい。

①これは、7つの愛の行為のまとめである。

②イエスは、レビ 19:18 の教えを具体化し、補強した。

Lev 19:18 あなたは復讐してはならない。あなたの民の人々に恨みを抱いてはならない。あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。わたしは【主】である。

5. 32～34 節

Luk 6:32 自分を愛してくれる者たちを愛したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、自分を愛してくれる者たちを愛しています。

Luk 6:33 自分に良いことをしてくれる者たちに良いことをしたとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも同じことをしています。

Luk 6:34 返してもらうつもりで人に貸したとしても、あなたがたにどんな恵みがあるでしょうか。罪人たちでも、同じだけ返してもらうつもりで、罪人たちに貸しています。

(1) 一般人とイエスの弟子の対比

①一般人でも、自分を愛してくれる者に愛を示す。

②一般人でも、自分に良いことをしてくれる者たちに良いことをする。

③一般人でも、返してもらうつもりで人に貸す。

④イエスの弟子の行いは、それとは次元が異なる。

6. 35～36 節

Luk 6:35 しかし、あなたがたは自分の敵を愛しなさい。彼らに良くしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いは多く、あなたがたは、いと高き方の子どもになります。いと高き方は、恩知らずな者にも悪人にもあわれみ深いからです。

(1) イエスの弟子の行い

①自分の敵を愛する。

②返してもらうことを考えずに貸す。

(2) イエスの弟子が受ける報い

- ①いと高き方の子どもとなる。
- ②いと高き方は、恩知らずな者にも悪人にもあわれみ深い。
- ③イエスの弟子は、父なる神の性質に似た性質を持つようになる。

Ⅱ. 4つの人生訓（37～38 節）

1. さばきは、さばきをもたらす。

Luk 6:37a さばいてはいけません。そうすれば、あなたがたもさばかれません。

- (1) これは、真理かどうか判断することを禁じているわけではない。
 - ①真の信者かどうかを見分ける必要がある。
 - ②罪かどうかを判断する必要がある。
- (2) これは、批判的な態度を戒めたものである。
 - ①私たちは、他人の動機をさばくことはできない。
 - ②他のクリスチャンの奉仕をさばいてはいけない（1 コリ 4：1～5）。
 - ③霊的な警察官になってはいけない。
 - ④最終的なさばきは、神が行われる。

2. 人を罪人だと決めると、自分も罪人だと決められる。

Luk 6:37b 人を不義に定めてはいけません。そうすれば、あなたがたも不義に定められません。

- (1) 「さばきに関する教え」と同じことが言える。

3. 赦しは、赦しをもたらす。

Luk 6:37c 赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦されます。

- (1) 罪の赦しは、恵みと信仰によって与えられる。
 - ①これは、裁判官である父なる神から与えられる無罪宣言である。
 - ②その赦しは、信じる者には無条件で与えられる。
- (2) ここでの罪の赦しは、父なる神との親子関係における赦しである。
 - ①クリスチャンが罪を犯しているなら、父なる神との関係は断絶している。
 - ②罪の告白によって、関係が回復される。

4. 気前良く与えると、気前良く与えられる。

Luk 6:38 与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れてもらえます。あなたがたが量るその秤

で、あなたがたも量り返してもらえますからです。」

(1) 種を蒔く人のたとえである。

①前掛けにたくさんの種を入れ、それを蒔いている。

②多く蒔く人は、多くのものを刈り取ることになる。

③気前良く与える人は、気前良く与えられる。

結論

1. 7つの愛の行為（27～36 節）

(1) あなたがたの敵を愛しなさい。

(2) あなたがたを憎む者たちに善を行いなさい。

(3) あなたがたを呪う者たちを祝福しなさい。

(4) あなたがたを侮辱する者たちのために祈りなさい。

(5) 復讐してはならない。

(6) 気前良く与えなさい。

(7) 自分にして欲しいことを、人にしなさい。

2. 4つの人生訓（37～38 節）

(1) さばきは、さばきをもたらす。

(2) 人を罪人だと決めると、自分も罪人だと決められる。

(3) 赦しは、赦しをもたらす。

(4) 気前良く与えると、気前良く与えられる。

3. まとめ

(1) 新生体験の重要性

①内面が変化する。

②新しい動機が与えられる。

(2) 聖霊の働きの重要性

①弟子の行いは、聖霊の助けによって可能となる。